ふるさと
再発見
広川町郷土史研究会

島津・大友・龍造寺三氏の覇権争いと九州静謐への道のり（その２）

島津勢、筑紫広門を下して岩屋城を包囲

天正14年（1586年）7月10日、筑紫広門の拠城である勝尾城（現在の佐賀県鳥栖市にあった）が陥落し、広門は捕らえられて大善寺に幽閉されます。島津氏にとっては挙兵の名分とした筑紫氏を下したことで、面目を保つことができたともいえます。当初の魂胆どおり島津勢はそのまま北上し、高橋紹運が立てこもる岩屋城（現在の太宰府市にあった）を包囲しました。

岩屋城の攻防戦は12日間に及び、ついには城主以下700人を超す城兵をことごとく玉砕し、落城します。

実は岩屋城に駆けつけ、ともに討死した広川出身の武将の名が残っています。萩尾麟可と大学父子、中島左馬介・同大炊介です。

萩尾大学については、「立花・高橋両家ニテ、拇指ノ算ニ附セラレタル剛ノ者ナレハ、味方ノ弱ヲ佐ケ翔廻リ云々」（『筑後将士軍談』）とあり、城があった四王寺山の中腹に墓が残っています。

また「高橋記」には、「紹運公の前後左右にハ、中島佐馬介・同大炊介云々」とあり、萩尾氏・中島氏ともに、岩屋城の中枢で戦ったことがうかがえます。そのほか筑後に縁の人物として、松延氏や三原氏の名が残っています。

岩屋城を落とした島津勢はさらに北上して、立花城（福岡市東区・糟屋郡新宮町・久山町境にあった）を包囲します。同8月には、大友氏からの援軍要請にこたえて、秀吉が送った黒田官兵衛などの先遣部隊が筑前に進出したため、島津勢は囲みを解いて急きょ退去を始めます。

立花城を守っていた立花統虎（後の立花宗茂）は、これを筑後川まで追撃し、取って返して高鳥居城（糟屋郡篠栗町）を攻め、島津方であった星野鎮胤・鎮元の兄弟を討ち取ります。

秀吉は同10月2日付で、島津義久あての文書をしたため、仙石秀久を使者として派遣します。「勅定※1により啓く、自分は関東の果てまで任せられ、綸命※2によって、天下はすでに静謐の処、九州が今も半ば牟楯※3していることは、甚だもってよろしくない。若し勅定に背けば、成敗する」といった内容の書面で、使者を上洛させよと迫るも、義久はあえて従わず、返答もしません。

このようなやり取りの中で同12月、秀吉は太政大臣に就き、かねてより申請していた新姓創出の許可が天皇から下りたことで、豊臣秀吉となります。

ここに全国統一の総仕上げを成し遂げるべく、島津氏討伐のため自ら九州への出陣を決意しました。

※1勅定……天皇が定めること
※2綸命……天皇の命令
※3牟楯……矛盾か

萩尾大学の墓塔（太宰府市四王寺山の中腹）。岩屋城の籠城戦に、父麟可とともに参陣して討ち死にしたという。

広川町古墳資料館だより

新型コロナウィルスの感染拡大防止アイコンとして「アマビエ」が使われています。

アマビエは江戸時代後期（1846年）、熊本の海に現れた妖怪で、「疫病が流行ったら私の写し絵を早々に人々に見せよ」と言って姿を消したそうです。当時の瓦版の挿図（写真・京都大学貴重資料デジタルアーカイブ収納）では、アマビエは半人半魚の姿をしていて、「豊作・疫病の予言をした」「江戸までその情報が届いた」と記述されています。

石人山古墳に立つ武装石人も、体を治癒するという俗信により、全身が木づきで叩かれ損傷しています。人々の病気治癒の願いが、印刷物や石造物の文化財に残されています。

集団健診 予約受け付け中

㊐住民課健康係　☎ 0943-32-1112

●場所・日時

上広川小学校	7/5 (日)	8:00 ～ 10:30
産業展示会館	7/10 (金)・11 (土)・20 (月)・21 (火)・29 (水)・30 (木)・9/5 (土)・8 (火)・10/5 (月)	
下広川小学校	9/6 (日)	
いこっと	9/16 (水)・17 (木)	
広川中学校	10/18 (日)	

※ 7/21・9/8 (火) は女性のみ。前立腺がん検診はありません。
※ 10/18 (日) の肺がん・胃がん・乳がん・子宮がん検診はありません。

●持参物　健康保険証、マスク

●予約方法　住民課健康係へ電話またはハガキ、インターネットでご予約ください。右の QR コードからも予約できます。（定員あり）

●対象・料金

	対象	69 歳以下	70 歳以上
肺がん	40 歳以上	無料	無料
若年者健診	20 ～ 39 歳	500 円	500 円
基本健診 特定健診 前立腺がん 大腸がん	40 歳以上	500 円	500 円
子宮がん	20 歳以上	500 円	500 円
肝炎 胃がん	40 歳以上	600 円	500 円
乳がん	40 歳以上	1,000 円	500 円

20 ～ 39 歳　40 ～ 74 歳　75 歳以上

広川文芸

ひろかわ俳句会

豆の飯塩はさらりと夫好み　青木佳代子
時鳥よく鳴く里に住みにけり　山崎　陽子
コロナ禍終息まちて梅酒つく　一瀬砂智子
木洩れ日のコーヒータイム柿若葉　原口あつ美
軒先の無人販売熟れトマト　水本　艶子
豆ご飯技ある祖母は日本一　結束　節子
孫と喰う初豆飯のうまきこと　松延　朝美
そよ風に土手草なびき風光る　野中　勝美
あのころの話しみじみ新茶汲む　柴田　眞理
豆飯や皮むき競った幼き日　渡辺　弘子
まどごしに甘酸っぱさやみかんの香　福田美知子
夏野菜収穫いつかと待ち侘びる　酒井　司
玄関に香り出迎へ豆ご飯　水本　辰次
ふきの香や山小屋辿る涌蓋山　原口　正信

櫻の会

コロナ禍に蟄居の要請つづく日々もくもく作るしかけの絵本　野中　勝美
自粛下に二歳の孫は買ひ出しへ連れて行ってと泣きすがりをり　中倉　明美
深々と息吸ひこみて新緑の気をとり込まむ指の先まで　池田　和代
全開のグランドピアノはそれだけでホールのごとく小部屋を変へり　濱武美智子
久々にホーム入居の友の声張りある声にお互い安堵す　細川　徳子
また一人思はぬ人の逝きませり黄泉の国へと旅立ちのとき　山崎美代子
ハチミツと砂糖たっぷり酸味強きイチゴ変身ジャムならいける　一瀬砂智子
終活を始めてみれば思ひ出の品ばかりにて部屋かたづかず　中嶋　玉子
まなうらに母の日傘が動き出すみどりの中の古きあの径（みち）　青木佳代子